

野田秀樹作 「キル」 より

どこからか子供たちが出て来て、学校の教室になる。

シルク 今日も、始めて見た日の笑顔でお暮しですか。僕は、長い間、このモンゴルの草原の転校生でした。 転校生には、いつも初めての日があります。初めての学校の初めての校舎で、初めての教室へ行くまでのあの長い廊下、その廊下だけは、どこへ行っても同じくらい長いのです。校庭にはずむ声を耳にすると逃げ出したくなります。やがて教室の引き戸を開け、自己紹介をします。僕の顔は凍りついたままです。迎えてくれる仲間は、珍しい動物でも見るように僕を見ます。転校をしてばかりいると、人を好きになることに臆病になります。別れがくるのを知っているから。けれども、初めて見た笑顔を愛してしまうことがあります。やがて別れがくることを忘れて好きになってしまうことがあります。あの春の日の教室で、あなたを見た僕がそうでした。あれから、このひとりの洋服屋は、月が出るとモンゴルの草原で銀色の夜を縫っています。夜が銀色に見えたら、それは、初めて僕があなたに贈る指輪です。 —これ、テムジンがあたしにとって？

野田秀樹作 「キル」より

テムジン それともこのミシンの夢は、死んでいく俺の景色なのか？ だったら、慌てることはない。急ぐのは生きている時だけだ。俺の葬式は青空の日を選んでやれ。それもとびっきり真っ青な青空だ。そうか、ああ、そうか、ただ見上げればよかったのだな。モンゴルの空の青さが、ここにある。空の青さは、世界のどこまでも続いているんだな。この世が生まれた時から、青い空は世界の制服なのだ。その青空の風と光の中に、さあ、俺の骨を砕いてばらまくがいい。モンゴルの草原に向けてばらまけ。熱い風と白い光が俺をモンゴルに帰してくれる。その日、俺は生まれるだろう。ミシンが夢を見た日、俺は産声をあげるだろう。

シェークスピア作 松岡和子訳 「ロミオとジュリエット」より

マキューシオ ようし、呪文で呼び出してやる。

ロミオ! 浮気者! 気違い! 恋の虜! 色男!

ため息に姿を変えて出てこい。

ひと声聞かせてもらえれば、それでいい。

「ああ!」でもいい、何とか言え、「惚れた」でも「はれた」でも。

陽気なヴィーナスおばさんへのご機嫌取りのひとつでも

目隠ししたその息子の仇名ひとつでもいい。

たとえば赤ん坊のアブラハム・キューピッドとかな。昔コフエ
チュア王が乞食娘に恋した時、見事その胸を射抜いたあいつだ。

聞こえないんだ、びくともしない、動きもしない。

エテ公は死んだか、ならば呪文で生き返らせてやる。

ロザラインのきらめく瞳に賭けて

あの広い額と赤い唇に賭けて

きれいな足とまっすぐな^{すね}脛と震える^{ふともも}太股に賭けて

ついでにその近くのご領地に賭けて

いつもの姿で出てこい。

チェーホフ作 神西清訳 「桜の園」より

ワーリャ もう寝なくっちゃ。どれ行きましょう。そうそう、あんたの留守のまに、
厭^{いや}なことがあったの。あの古いほうの下部屋^{しち}には、あんたも知ってのとおり、古手^{ふるて}
の召使ばかりいるでしょう、 エフィーミュシカだの、ポーリャだの、エフスチ
ーグネイだの、カープルだのって。あの連中、どこかの浮浪人^{ふろうにん}どもを引っぱりこん
で泊めだしたのよ。わたし黙^{もく}っていてやった。そこへ耳にはいったんだけど、わた
しがあの連中にエンドウ豆ばかり食べさせるような、そんな噂^{うわさ}を飛ばしてるの。し
わん坊だから、ですってさ。 ……それがみんな、エフスチーグネイの仕業なの。
……「よし、そんならこっちも覚悟がある」と、わたしは思ってね、エフスチーグ
ネイを呼びつけた……（あくびをする）するとやって来たから……「なんてお前は、
ええエフスチーグネイ……馬鹿なんだい」って言ってね……（アーニャを見て）ア
ーニチカ！……（間）寝ちまった。……（アーニャの腕をかかえて）さ、ベッドへ
行きましょう。……さ、行くのよ！ ……（連れて行く）わたしのいい子がおねん
ねだ！ さ、行きましょう……（ふたり行く）

シェークスピア作 松岡和子訳 「ヴェローナの二紳士」より

ジュリア ああ、あの手紙、読んでおけばよかった。

でも呼び戻して読ませてと頼むなんて、きまり悪くて

できやしない。さっきは読ませようとしたから叱ったんだもの。

ルーセッタは馬鹿、私が処女だと知っているくせに

あの手紙を無理に読ませようとしなないんだもの、

処女は、本心は「イエス」でも

恥ずかしくて「ノー」と言ってしまうものなのよ。

ああ、嫌だ、この愚かな恋は何てわがままなんだろう！

駄々っこのように乳母を引っ掻いたかと思うと、

すぐ大人しくなってお仕置きの鞭にキスするんだから！

私は何てがみがみとルーセッタを叱りつけ、追い払ってしまったんだろう、

本当はここに居てほしかったのに！

何て怒った怖い顔をしてしまったんだろう、

本当は嬉しくて、心の中ではニコニコしていたのに！

罪滅ぼしに、すぐルーセッタを呼び戻し

私が馬鹿だったとあやまって、赦してもらおう。

ちょっと、ルーセッタ！

シェークスピア作 松岡和子訳 「ヴェローナの二紳士」より

ヴァレンティン 女は大いに気に入ったものを馬鹿にすることがあります。

別の贈り物をお届けになればいい、あきらめてはなりません、

最初に馬鹿にすればそれだけあとの愛は高まるからです。

その人が顔をしかめるのは閣下が嫌いだからではなく、

もっと愛してもらいたいからです。

その人が叱りつけるのは、閣下を追い払うためではない、

お馬鹿ちゃんたちは一人にされると頭に来るものです。

その人が何を言おうが引き下がってはなりません、

「出て行け！」は必ずしも「立ち去れ！」という意味ではない。

よいところは口を極めて褒め称え、

どんなに色黒で醜くとも天使のように美しいと言うのです。

舌があるくせに、女を口説き落とせない男は

私に言わせれば、男ではありません。